

クルト・ケプルナー著

『戦争の国への旅 — ユーゴスラビアでの—外国人の体験』  
抄訳（1）

元 吉 瑞 枝

～ はじめに（抄訳にあたって）～

☆原著は次の通りである。

Kurt Köpruner: *Reisen in das Land der Kriege*  
— *Erlebnisse eines Fremden in Jugoslawien* —

Überarbeitete Neuauflage: Diederichs im Heinrich Hugendubel Verlag,  
Kreuzlingen/München 2003

☆著者について

1951年、オーストリアの最西部、スイス国境に近いフォアアールベルク州の州都でボーデン湖畔に面するブレゲンツに生まれ、1989年まで当地に在住。商学を修めた後、成人学校の運営に携わり、のち、オーストリア労働組合のフォアアールベルク州・書記長となる。また、オーストリア社会民主党の黨員としても活動。

しかし38歳のときそれらの活動を打ち切り、ドイツへ移住してこれまでとは全く違う職歴を開始。機械製造業界関係のコンサルタント会社を設立し、その経営にあたる。この仕事の関係でしばしば旧ユーゴスラビアの様々な地域を訪れる機会をもつ。1990年代の初めから、クロアチア人女性および彼女の二人の子供と共にドイツのレーゲンスブルクに住む。

ユーゴの人々との公私にわたる多様な接触を通して、ユーゴ解体を身をもって体験。みずから現地で体験したことと、ドイツやオーストリアで報道されていることとの大きな隔たりを感じたことが、本書執筆の動機となった。

本書は、著述家としては全く無名の著者による初めての大部な著書であるが、ドイツ語圏で高く評価されて版を重ね、複眼的な視点を通して展開された説得力あるユーゴ論と個人的なエピソードや旅を語る物語との交錯した独自の表現として注目を浴びた。

### ☆本書の内容、目次概観

本書は、1990年代の10年間にわたる旧ユーゴスラビアをめぐる著者の体験と考察から成る。本書の目次の章題には、全章にわたる通し番号が（351番まで）付されているが、その中で5個の章題がゴチックで記され、そのあとに続く章を一つのブロックとしてまとめるタイトルのような役割を果たしている。その5個のブロックのタイトルを以下に掲げて、352頁にわたる本書の全容についてその概観を予め示しておきたい。（下記の〈Ⅰ〉〈Ⅱ〉などの数字は訳者によるもので、原著には〈\*〉で示したような通し番号が付されている。）

〈Ⅰ〉	世界警察 — 1900, 1999/いくつかの前置き	〈* 15〉
〈Ⅱ〉	クロアチアでの戦争 — 1991年から1995年まで	〈* 25〉
〈Ⅲ〉	ボスニアでの戦争 — 1992年から1995年まで	〈* 133〉
〈Ⅳ〉	セルビアでの戦争 — 1998年から1999年まで	〈* 189〉
〈Ⅴ〉	コソボで一旅行者として — 2000年10月	〈* 293〉

なお本書の扉には、「アイーダ、エルギナ、アドリアナ、ツイツァに—バルカンでの戦争の全犠牲者に代えて」との献辞が掲げられている。アイーダ、エルギナ、アドリアナ、ツイツァは、本書に登場する、各々、クロアチア、ボスニア、アルバニア、セルビアの女性。また、同じ頁の下に、「人間の真理とは、論駁不可能な錯覚である」というニーチェの（『悦ばしき知識』からの）言葉が記されている。

### ☆本稿について

本稿は、本書の中でも特に著者が直接体験したことを語っている箇所を中心に抜粋し、数回にわたって邦訳するものである。このうち今号の「抄訳（1）」は、上記目次で挙げられている章のうち、主として〈Ⅱ〉の最初の数章を扱うものである。〈Ⅰ〉については、（冒頭に置かれた引用文を除いて）概説にとどめ、〈Ⅱ〉は、一部を除き全訳した。なお〈Ⅱ〉の中で、訳者による要約にあたる箇所は、前後に〔 〕を付して示した。なお本書の〈Ⅱ〉以降の全ブロックについて、その中でさらに核となるいくつかの章題が、他の章題とは区別されて冒頭に示され、他の章をまとめる役割を与えられている。本稿では、〈Ⅱ〉について、核となる章題は★で、その下位におかれた他の章題は\*で示した。

oo

～ < I > 世界警察 — 1900, 1999 / いくつかの前置き ～(概説)

「20世紀は、確信に満ちて始まった。未来を楽観的に見、知性と技術的進歩の力をあまりにも盲目的に信じた結果、今日になって、期待とその結果とのあいだに開いた底知れぬ深い溝を憂慮せざるを得なくなっている。1899年の暮には、そのあとにつづく政治家たちの決断が、全人類にとって壊滅的なものとなるだろうとは、誰も想像だにできなかった。」(ガブリエル・コロコ『戦争の世紀』) (1)

以上の引用のあとで、20世紀が、先行するすべての世紀の無数の戦争による死者よりも多くの戦死者を出したこと、またその世紀の始まりに起こった列強の中国侵略(2)と、その世紀の終わりに起こったNATOの対ユーゴ空爆(3)との共通点と違いに言及している。共通点は、前世紀まで互いに争っていた列強が結束して「非文明」(とみなした国)を攻撃したこと、違いは、前者がその後の歴史の中で帝国主義的侵略と認識されるようになったのに対して、後者は「人権」の名においてなされ、現在もそのように記述されていることである。1999年に19のNATO諸国によってなされた爆撃による死者は数千名(NATO発表)に上り、ユーゴ全土のインフラ(工場、病院、学校、道路、橋、電気、通信など)は破壊された。しかし、この攻撃に対する抗議の声は、湾岸戦争に対する反対運動と比べても皆無とっていいものであり、また、その賛否の分岐は、従来の左右の政治の枠組みからは想定できないものだった。

著者(ケプルナー。以下、同様)自身も、NATOの空爆とそこに至る欧米のユーゴをめぐる政治に対する批判と、他方における当地の民族紛争とそれに伴う殺戮などの犯罪行為に対する批判とのあいだで揺れ、その矛盾に引き裂かれたままだったが、その間に、メディアの方向は一方的に決定されていた。丁度この時期に思いがけない個人的な事情によりバルカンとの頻繁な接触を余儀なくされなかったら、彼自身もそれに影響されたかもしれないが、そのようなメディアの報道とみずからの体験の違いが、この問題について彼により深く考えることを強い、またみずからの体験を語る(本書執筆の)動機にもなった。

しかし著者には、その前の10年間、1979年から89年にも、ユーゴスラビア

との関わりの前史があった。著者の故郷のフォアールベルク州には、70年代および80年代に約2万人のユーゴスラビア人が外国人労働者として住んでいた。そもそもフォアールベルク州には、トルコ人をはじめとする外国人労働者が30万人おり、その住民に占める割合は、ヨーロッパで最も高かった。加えてオーストリアでは彼らも平等の選挙権を有していたので、各政党は、彼らの利害にも配慮するように振る舞う必要があった。当時社会民主党の党員であった著者も、このような事情から、フォアールベルクのユーゴスラビア・クラブの多くの文化行事やスポーツの祭典などに参加していた。そのような場でのスピーチではどんなテーマにせよチトー(4)と関連づけてチトーの名前を持ち出した者の方が喝采を得るのだった。それはチトーの死(1980年)の前も後も変わらなかった。そこではまたユーゴの各民族ごとのダンスや音楽が披露されたが、そのとき初めて彼は、ユーゴに多くの民族があることを意識した。しかし彼には、彼らはただ衣装や踊り方に差があるほかは何の違もなく、すべて「ユーゴスラビア人」であったので、どうしていちいち「ボスニアの歌」とか「ダルマチアの踊り」と紹介されねばならないのか疑問に思ったが、このように各々異なる民族グループを常に強調するのは、ユーゴ諸民族の心を結び合わせようとするチトーの政策であったことを、その理念の挫折がすでに動かしがたいものとなったときに初めて知った。また、この当時すでにフォアールベルクに、このような全ユーゴ・クラブとは別に、それに参加していないクロアチアだけのクラブがあったが、その意味を当時ははっきりとは理解していなかった。

## ～ <II> クロアチアでの戦争 - 1991年から1995年まで ~ (全訳)

1989年6月に私の政治的な活動歴が終った後、ユーゴスラビアは、当初、私の視界から完全に消えた。私は、機械製造業界での新たな仕事によって求められるままにドイツへ<亡命>するという道を選択することになり、その後、まもなくして東欧に目を向けることになったが、その対象は、主にチェコスロヴァキアやポーランドやハンガリーであった。ユーゴスラビアの企業とは、ただ散発的に接触があるのみであった。

### ★戦争前の最後の数ヵ月

## \*スネジャナ

このような事情は、1990年11月23日に突然変わった。この日スネジャナが、具体的な仕事上の要件を取り決めるために、はじめてドイツにある私の会社へやってきた。その1年近く前に、我々と良好な関係にあるユーゴスラビアの友人が、わが社が当地の企業と初めて接触できるように取り計らってくれ、私はそれらの企業に、彼らの機械製造能力の有用性についての照会を郵便でしていたのだ。これらの照会は、たいてい多くの図面入りでなされた。それに対して、設問への回答が郵送されてくるか、あるいは他の企業に転送されたが、当時、これらの図面の入った郵便の一つが、多くの幸運な事情が重なって、スネジャナの机上に届いたのだった。

彼女は、当時、ダルマチアの都市ザダール<sup>(5)</sup>で工業技術分野のオフィスを自分で経営していたが、それまでは専らユーゴスラビアの企業を相手に仕事をしてきた。工業製品に関する我々の設問に対して、彼女は、ユーゴにおける製造能力は良好であるとしており、私にファックスでいくつかの興味深い提案をしてきた。私は当時、そのような提案を数多く受けてはいたが、スネジャナの提案は、とても多くの知見を与えてくれるものだったので、具体的な取引先に関して彼女と直接個人的に話し合うのが有意義であるように思えた。私は彼女をドイツへ招待した。

彼女が私の前に姿を現したとき、私は彼女に一目惚れした — そして彼女の方もそうだったことが、その日のうちに判明した。まるでメルヒェンのようだった。彼女は三日間レーゲンスブルクに留まった。彼女が帰っていったとき、私が今後ユーゴとの関係を築くことに全力を傾けることになるだろうということは、もう明らかだった。とりわけ彼女からユーゴの機械製造業に関して素晴らしい事柄を聞いていたので、なおさらのことだった。我々は、ユーゴの最も興味深い企業をまわる一週間の旅行を、彼女の方で即刻準備するよう取り決めた。彼女はそれを模範的なやりかたでやってのけた。そして12月の半ば、彼女が帰ってから三週間も経たないうちにもう、私はザグレブへ飛んだのである。そこで彼女は私を待っており、我々は当地で、またバニャルカやサラエボやコニーツやトラブニクで、群を抜いてすぐれた機械設備のある多くの企業を見てまわった。至るところで、格別に親切で、専門的にも非常に有能な人々に出会った。

### \*何かが起こりそうな気配

この時点で私は既に、スネジャナから最初に聞かされていた、当初は支離滅裂だという印象を受けた数々の話によって、ユーゴの国内が騒然としていることを知っていた。それでも〔現地へ行ってみて〕、ユーゴ崩壊というテーマが人々のどんな会話の中にも現に入り込んできてそれを支配しているのは、私には、やはりとても驚きだった。我々が訪問したのはいずれも輸出向けの機械設備製造業の企業だったが、それらの会社のすべてが、もっか受注に問題を抱えていた。すなわち、かつて非常に大きな生産設備をかけて輸出していた東欧、なかでもソ連の市場が、ほとんど突然、完全に失われてしまったことである<sup>(6)</sup>。加えて、チトーによって築かれた数十年にわたるきわめて良好だった関係ゆえに存続してきた、いわゆる非同盟諸国<sup>(7)</sup>との商取引が、それらの国々の景気後退のためにほぼ皆無にまで落ち込んでしまった以上、今では何よりも国内の取引が最も重要な市場となっていた。このような死活にかかわる懸念にもかかわらず、あるいはひょっとしてそうだからこそともいえるだろうが、我々の交渉相手との会話の主たるテーマは、経済よりはむしろ政治のこと、すなわち、ユーゴスラビアが将来、「連邦」(*Föderation*)になるべきか、「国家連合」(*Konföderation*)になるべきか、というような具体的な問題についてであった。

「連邦」と「国家連合」の区別を把握するまで、私には少し時間がかかったが、「連邦」とは、多少とも強い中心を有する連邦国家のことであり、「国家連合」とは、独立した国家の多少とも緩やかな結合のことである。議論は、当然のことながら、この「多少とも」というところで停まってしまった。その点では、各人が各々の定義を持っていた。にもかかわらず、誰もが皆、実に我々が訪ねた会社の最初の交渉相手の全ての人たちが、次の点では一致していた。すなわち、ユーゴスラビアという国がそんなに簡単には解体することはあり得ないだろう、と。無数の理由が挙げられた。つまり、ユーゴでは、ほとんどあらゆる家族や政治や軍隊やスポーツや、またとりわけ経済においても、すべてが民族的に混淆しているから<sup>(8)</sup>と。

どんな場合にも概して経済が決定要因となるものであり、私の対話の相手が常に大企業の重役だったということもあって、私は特に、チトーがきわめて巧妙に企業を地域的に分散させていたという話題にとりわけ興味を抱いた。彼らの話によれば、ユーゴ内の他の共和国で国内の売り上げの大部分すなわち75%またはそれ以上の売上高を上げていないような大企業は存在しなかつ

た。また、これも同様に重要なことだが、しばしば大企業の多くの会社や下請け会社の所在地が、ほとんど例外なく、二つまたはそれ以上の共和国に置かれていたとのことである。

もちろん理論的には、ユーゴスラビアが解体しても、その後に成立する新たな国境を越えて、生産や部品の供給や販売などの仕事をすることも不可能ではないが、現実には、もしユーゴが解体することになったら、恐ろしい大虐殺が伴い、数十万人もの死者が出るような事態になるだろう、と、私の交渉相手たちは皆、異口同音に語った。

私には、それは、大変誇張された話のように思えた。けれども奇妙なことに、この点では、皆同じく、完璧に確信していた。彼らによれば、もしそんな事態にでもなれば集団自殺にも等しいことを、ユーゴの誰もが現に意識しているからこそ、きっとそんなことにまではならないだろう、というのであった。なぜ皆がそのことにそんなに確信をもっていたのか、それが私には、その後、たとえばカールハインツ・デシュナー<sup>(9)</sup>の著作やその他の種々の文献により、バルカンにおいて第二次大戦がどのような経過を経て進んでいったかを知ったときに、初めて明らかになった。私は、それらの文献を通して、当時ウスタシャ<sup>(10)</sup>やチェトニク<sup>(11)</sup>が、またムスリム<sup>(12)</sup>とアルバニアのSS師団<sup>(13)</sup>が自国民に対して、またチトーのバルチザンとの抗争のなかで行った大量虐殺のことが知ったのである。

ユーゴスラビアでの当時の日々は、私にはとても印象深いものだった。スネジャナは、すべてを見事に準備してくれていた。彼女は実際、レーゲンスブルクで予告していたよりずっと多くのことをやってくれた。彼女が精力的に、時には、同時に十人の重役たちを相手に交渉する様子を、そのとき初めて私は知った。あるときは、高い建物の最上階で、たとえばサラエボの二つのUNISタワー<sup>(14)</sup>の一つで……それは、のちに、何度も爆撃されるのをテレビで見ることになったタワーだった。

ところで私たちは、プライベートにも素晴らしい時を過ごした。サラエボの旧市街のロマンティックな路地や、吹雪の中のボスニアの高地で……その後、ザグレブにレンタカーで帰る途次、私は車の大事故を起こし、警察で延々と取り調べを受ける羽目になったが、それさえも私たちにとってはいいことを伴っていた。すなわち私は飛行機に乗り遅れてレーゲンスブルクの自社のクリスマス・パーティには出られなくなったが、その代わりスネジャナともう一晩一緒にいることができたのだった。要約すれば、ユーゴスラビアへの私の最初の旅は、とても素晴らしく、これからその地で起こるであろう

ことに対する私の関心を喚起するものであった。そしてこの時から私は、このテーマについて我々のメディアで報道されていることのすべてに、食い入るような注意を向けるようになった。

1990年の大晦日に私はベルリンへ行った。そこでは、この都市の力強い再興が目前に迫っているということが既に感じられた<sup>(15)</sup> だが一月三日にはもう、私は再びユーゴに、今度はベオグラードにやってきた。私はスネジャナと一緒に、企業訪問の第二弾として、ベオグラードを訪ねたのである。今回も私はいくつかの企業を訪ね、近代的な設備が整っているのを目のあたりにした。たとえば、キキンダ（ヴォイヴォディナ地方の北東の街）のゼネラルモーターと連携した合弁ベンチャー企業などが印象に残った。そして我々の訪問の非公式な時間、美味しい食事を前にしたそのひとときには、再び、専らただ一つのこと、すなわちユーゴスラビアの未来が話題となったのである。これらの日々においても、私は、今度は主にセルビア系と思われるホスト役の人たちから、ユーゴの憲法や連邦の構造、そして、共通の国家を維持していく経済上の或いはその他の必然性などについて、再び大変興味深いことをたくさん聞くことができた。もちろんセルビアとクロアチアとスロベニアの政治家たちのあいだの現下の無数の諍い<sup>(16)</sup>についても、誰もが、語るに事欠かなかった。

私たちはベオグラードで二日間の素晴らしい市内観光をし、ヴェルディのオペラを観に行き、高級な「ホテル・モスクワ」に泊まった。街は、枯れた葉をつけた櫛の枝—それが当地ではクリスマスの木<sup>(17)</sup>なのだ—と政治的なポスターに溢れていた。おそらく選挙が日程に上っていると思われた。（のちに分かったのだが、現実には、それはもう終わったあとだった。）その中で特に、ヴク・ドラスコヴィッチ<sup>(18)</sup>という髭を生やした男が目についた。その容貌は、我々の世界なら誰もがイエス・キリストを連想するようなものだった。

私たちはベオグラードから、スネジャナの故郷のザダールへ飛行機で行こうとしたのだが、この日、飛行機が次々に欠航となって飛べなくなった。この日は空港で丸一日空しく待ったあとで、断念してレンタカーでザグレブへ向かった。

つづく数ヵ月間、私はほとんど毎日スネジャナと電話で話した。また、レーゲンスブルクやウイーンやザグレブで数回会ったこともある、が、いつも一日か二日しか一緒にいられなかった。私たちの会話は、ユーゴで今まさに起こっている事柄で占められていた。スネジャナは、彼女の故郷の街で



日々起こっているという異常な出来事について、話すことがたくさんあったのだ。たとえば、〔人々のあいだに起こっている〕重大な差別や偏見について話題になっていた—が、私には、彼女が誇張しているのではないかという疑念が消えなかった。すべてが、あまりにも馬鹿げて混乱しているように聞こえ、また、それらの話は、我々の国で聞いたり読んだりしていることとは、全く違っていたからである。

>> 次の三章、略。以下、要約 <<

〔ユーゴで起こっていることは、すでにドイツのメディアでも盛んに採り上げられるようになっていたが、その基調は、反ユーゴ、反セルビアで貫かれていた。特に、1991年のスロベニアとクロアチアの独立に際しては、オーストリアおよびドイツの政治家の多数がそれを支持。そのキーワードは「民族自決権」であった。しかし雑誌『シュピーゲル』や『プロフィール』の論調は、当時これを「分離主義」として批判し、また他のヨーロッパ諸国もユーゴの分裂に反対していた。私（ケプルナー。以下、同様）も両共和国の独立支持の熱狂に対しては距離を置いて見ていたが、実のところどのように考えたらいいのか、自信がなかった。なぜなら「民族自決」の権利もまた反駁しえないものだと思えたからである。しかし他方で、私の最初のユーゴ訪問で知り合った人々が異口同音に話していたユーゴの将来、ユーゴの各共和国が分離して国家が解体したのちにやってくるだろうことについての恐ろしい予言も忘れられなかった。

このような中で、当時すでに多くのメディアから「悪魔」呼ばわりされていたスロボダン・ミロシェビッチ<sup>(19)</sup>がブリュッセルでのユーゴ各共和国代表の集まった会議で行った次のようなスピーチを読んだ。「自分（ミロシェビッチ）も民族自決権の尊重には賛成である。が、現在のユーゴ各共和国の境界は純粹に行政的な区分であって民族的な実態を反映したものではない。真に民族の意思を尊重してユーゴを分割するのであれば、境界線を引き直す必要があり、自分はその協議に応ずる用意がある。合意に達する前に、争っている片方の意見のみによって既成事実をつくらないように……そうしないと、ユーゴ全土で、コントロール不能の混乱が生ずることが避けられないだろう。」彼がここで、クロアチアに住む60万人以上のセルビア人や、スロベニアのあちこち及びクライナ〔自治区〕<sup>(20)</sup>に住むセルビア人の「民族自決権」

を示唆しているのは明らかである。しかし、「民族自決権」は（もしそれを言うなら）すべての民族に対等に、というこの演説の趣旨もまた誰にも反駁しがたいものであった。

1991年春のユーゴ大統領の指名をめぐって、次のようなことがあった。ユーゴスラビアの憲法によれば、大統領は当時、国民による直接選挙ではなく幹部会より選出され、また1年ごとに各共和国の持ち回りとする、と定められていた。1991年にはクロアチアの順番であり、その大統領候補には、反ユーゴ論者として名高いクロアチアのツジマン大統領の信任の篤いステイペ・メシチの名前が挙げられていた。ユーゴの解体に反対する人たち、なかでもセルビアは、彼の指名を拒否することに傾いていたが、同時に、指名を拒否すれば、大統領を各共和国の持ちまわりにするというユーゴの憲法を否定することにつながるというジレンマに陥った。そのとき、E G（EU＝欧州共同体の前身）の当時の代表国であったルクセンブルクのジャック・ポーとオランダのハンス・ヴァン・デン・ブルークは、兩人とも断固としたユーゴ存続論者であったが、ユーゴの全共和国があくまで憲法に則って行動するように求めた。それを受けて、セルビアはメシチの大統領指名に同意し、メシチはユーゴ最後の大統領となった。この経緯に見られるのは、ユーゴの全共和国を貫く憲法の尊重に象徴されるように、ユーゴスラビアの平和的存続という高い目標が、この時点ではE Gの理念として掲げられていたということである。

しかしオーストリアの政治的動向は、これと真っ向から対立するものであった。その中心となっていたのが、外相のアロイス・モックで、彼は盛んにテレビなどで感情的な論法で、セルビアの人権侵害から守るためにスロベニアとクロアチアの独立を支持しなければならないことを訴えた。首相のフランツ・ヴラニツキーを除き、左翼を含むあらゆる政党の多数の政治家たちがこれに同調していた。それに対して私は憤りを覚えたが、当時、私のユーゴについての知識はまだ浅かったので、私の憤りの理由は主に、他国の内紛へのそのような内政干渉が、オーストリアの憲法で規定されている中立性と相容れないものであるということにあった。しかしこの矛盾についての言及はいつさいないまま、ジャーナリズムもユーゴ解体や反セルビアのキャンペーンを強めていき、外相のモック自身もヨーロッパ諸国やアメリカへ赴き、みずからの主張の実現に向けて精力的に動いた。この時点では、ドイツのゲンシャー外相はむしろユーゴ存続派であり、スロベニアとクロアチアに対する共感を抱いていたコール首相も積極的には動いてはならず、E Gもバルカ

ンの緊張を緩和しようという方向で模索していた。それだけに、ユーゴの隣国の「中立国」オーストリアの外相として、ユーゴの内部に精通しているとみなされたモックの果たした役割は大きかった。(クロアチアの都市ザダールの大通りには、いまも彼の名を冠した喫茶店がある。)]

### ★押し寄せる徴候

私の次の本格的なユーゴへの旅行は、1991年5月末頃だったにちがいない。いずれにせよその旅の初日は、サッカーの欧州選手権を争う「レッドスター・ベオグラード」と「オリンピック・マルセイユ」の決勝戦<sup>(2)</sup>のあった日だった。この旅のことは、私はいまもなおありありと思い出すことができる。それは、その後の戦争についての私のイメージを形作ることになった種々の事件に見舞われたものだったからである。

### \* 「レッドスター・ベオグラード」

それはもう出発のときに始まった。私はスネジャナと、ザグレブのホテル「インターナショナル」で待ち合わせをしていたが、またその日、どうしてもテレビでサッカーの決勝戦を見たいと思っていた。けれども残念なことに飛行機の到着が大幅に遅れた。私がようやくホテルに着くと、たくさんの人達—見受けたところ全員ユーゴの人達と思えた—が、テレビの間になっていた食堂からちょうどどっと出てきたところであった。皆、とても怒っているようで、興奮して互いに言い合ったり、誰にともなく罵ったりしていた。私は数人にドイツ語と英語で、どちらが勝ったのかと尋ねたが、無愛想な反応しか返ってこず、そのうちの一人は、私に「くそったれ！」という粗暴な言葉さえ投げてきた。これで私には明らかだった、フランスが勝ったのだ。

あとで、スネジャナがホテルの部屋で私に「レッドスターが勝ったのよ」と笑いながら言ったとき、私は、彼女に同情しながら、それを訂正した。ところが彼女は、自分の方が正しいと言い張った。そこで私はついにホテルのフロントに電話してみた—再び明らかに不機嫌な様子であることが感じられる応対だった—。すると、彼女の言っていることの方が正しいことがわかった。私は、何が何だかもうさっぱりわからなくなってしまった。私は、

故郷のフォアールベルクにいた頃から、ユーゴの人々が熱烈なサッカーファンだと知っていたので、欧州選手権の決勝戦に出場したこと、それ自体がユーゴスラビア全体にとって輝かしい成果なのだ、と、ナイーブにも思っていたのだった。

当時、知られているように、実際「レッドスター」が欧州選手権の優勝カップを手にしたのだった。そしてこのときのことを通して私には、クロアチアとセルビアのあいだに既に存在していた憎しみがただならぬものであることが、初めてはっきりしたのだ。もし一年前だったら、ユーゴのチームが、どの地方のチームであろうと、欧州選手権の決勝戦に出場することになったら、ユーゴ全土で国民的なお祭りになったのは間違いない、と何人もの人の口から聞いた。セルビアのベオグラードのチームの勝利について私から尋ねられたクロアチア人たちがあんなにも怒った反応をしたことが、それまでに読んでいたどんな報告よりも、ユーゴをめぐる事態がこの間に既にどんなに悪化しているかを私に見せつけたのであった。

その後は、クロアチアのその時々のお話の相手の政治的立場を知ることは、私には簡単だった。ただ、「レッドスター」の勝利をどう思うかと尋ねてみるだけでよかった。或る人たちは、喜びのあまり、ただちに目が輝いた。彼らは明らかにまだ戦争に加担していないのだ。他の人たちは、セルビアのセンセーショナルな勝利を妬んでいることを隠すことができなかった。そしてこちらの方が明らかに多かった。

#### \* クライナ地方を通過

私たちはザグレブで、いくつかの会社を訪問した。そのあとでザダールに行く予定だった。スネジャナはザダールへ帰らねばならない用事があり、私もついに、彼女が私にもう何度も熱心に語ってくれた、アドリア海に面したその彼女の故郷の街を訪ねることにしたいと思ったのだ。ザグレブからザダールまでの300キロの距離を飛行機で一挙に飛んでしまうというのが、彼女の計画だった。けれども私には、飛行機で行くなんて少々大げさだと思えた。それに私は、前にヴァカンスで来たことのある、素晴らしい風景に富んだその地帯、名高いプリトヴィツェ湖群の傍らを通過していく道のりを楽しみにしていたのだ。スネジャナは、車で行くのは問題があり責任が負えない、と言ったけれども、最後には、レンタカーで行くことに同意した。彼女がまだ二、三の買物をしているあいだに、私は、レンタカーの会社AVISの事

務所のある「インターコンチネンタル」に出かけていった。

その事務所の所長も、私たちの行き先を聞くと、とても心配そうな顔をした。彼は、ほとんど半時間も、せわしなくあちこちに電話しまくった。それらは、彼が私に意味ありげな目つきで伝えてくれたところによれば、いくつかの省庁や警察や軍隊とのことだった。最後に彼は、AVISのザダール支店長へは電話が繋がらなかったが、ドイツからきたビジネスマンであるあなたには何も起こらないように我々が取り計らおう、と説明した。また、あらゆる不測の事態に備えて、その他のいくつかの電話番号および走行ルートに関する詳しい情報を持たせてくれた。それによれば、我々は絶対に最短ルートを避け、大きく迂回して海岸沿いの道を通っていかねばならない、とのことであった。

彼の仰々しい態度全体が、私には、随分もったいぶっているように思えた。けれども私は、ついに車を手に入れたことでもう満足だった。スネジャナと落ち合って、彼女にAVISの社員の奇妙な振る舞いについて語ると、彼女は、以前よりももっと動揺した。だが私にとっては、すべてがただワクワクするようなことだった。それで私は、警察に停められない限りは、距離の短い方のルートをとろうと主張した。もちろん私は、クロアチアの不穏な情勢のことは読んで知っていたが、おそらくそんなにひどいことになるはずはあまい、と思っていたのだ。

ザグレブから約40キロのカルロバツから、道路の規制が行われていた。道路の脇に戦車が並び、自動小銃を構えた兵士たちが氷のような表情で私たちの書類を調べ、車の中をくまなく調べた。だが、そのあとで無言のまま通過を許可した。このようなことが道中、何回かあった。スネジャナはほとんど一言も話さなかった。数年後になって初めて彼女は、あのとき物凄い恐怖に耐えていたのだ、と語った。それにひきかえ私の方は、この上なく上機嫌で、何か本当に興味深いことを体験しているのだという気分だった。

三つめか四つめの道路遮断機を通り過ぎたあと—もうプリトヴィツェの湖水地帯に入っていた—光景は不思議な具合に変化した。戦車や兵士たちはまだあちこちにたくさんおり、本物の砲身も—下手なカムフラージュをされて—道路の左右に見られたが、髭を生やした制服の男たちが私たちを、過分の愛想よさで迎え入れてくれ、空中にVサインを振りかざすのだった。彼らは、私のオーストリアのパスポートを見ると、奇妙な反応をし、互いに活発に議論を交わし、数分スネジャナと話し合った。もちろん私にはその内容は何も理解できなかったが、彼らは結局、それ以上詳しく取り調べないまま、

敬礼しながら私たちを通らせてくれた。スネジャナは神経がピリピリしていて、これらのこと全部を私に説明する力がなく、ただ絶えず、「みんな狂ってるのよ」と言うばかりだった。

何度か私は車を停めて、喫煙のための休憩をとった。そして、四年前にパコスターネの旅行代理店「クラブ・メッド」からの帰り道、ここで渋滞のため何時間も車の中で待たなければならなかったことを、スネジャナに語った。だが今、道路はすっかり空っぽで、その上でキャンプでもできそうだった。私たちの走行中、ただの一台の車も走っているの見なかった。けれどもスネジャナは決して車を離れようとせず、早く先へ行くようにと急ぎ立てた。

私たちは、クロアチアのクライナ地方の真ん中にいたのだ。ここは、のちに住民を襲った悲劇で名前が知られるようになったところである<sup>(2)</sup>。道端に立っていた僅かばかりの人たちは、私たちが通り過ぎていくのを見て、みんな親しみをこめて手を振った。だがこれも、私たちがザダールに近づくと、再び変わった。兵士たちによる検査も、またもや非常に無愛想なものになった。やっと目的地に到達したあとになって、スネジャナは私に気づかせてくれた。私たちの借りた車がベオグラードのナンバーをつけていたために、クロアチアの兵士には大変怪しまれ、その反対に、セルビア人の居住地域であるクライナの兵士たちは私たちを、ベオグラードから派遣された使者とみなしたのだ、と……それで私はようやく、あの特別の、親しそうな合図の意味も解けたのである。

\* ヨシプーあるいは「奴らは神に戦争を求めて祈る」

ザダールに到着すると、スネジャナはすぐに片づけねばならないことがいくつもあったので、私のために使える時間はなかった。けれども彼女は、ヨシプというとても感じのいい若い男を私に紹介し、彼が私を連れて旧市街を少し案内してくれるようにしてくれた。私たちはザダールの郊外にいたので、車で街の中心へ行こうとした。だが彼は私の車を見て真っ青になり、自分はそれに絶対に乗ることはできない、ベオグラードのナンバーのついた車に乗っているのを誰かに見られたら、もうお終いだ、最悪の事態も覚悟せねばならない、と言った。彼には、ダルマチア地方の最有力者の一人と言われている裕福な伯父がいるが、そんなことにでもなったら、この伯父が彼を勘当して親戚の縁を切ってしまうかもしれない、と言うのであった。私はそれを

一種のウィットだと思った。ところが彼はその場に立ちどまったまま動かないので、私たちは二人とも為す術もなくぼんやりと突っ立っていた。ついに私は彼に私のサングラスをかけさせ、<sup>ひさし</sup>庇つきの帽子もかぶらせた。こうして彼は何とか車の中に座ったが、帽子の庇をずっと下まで下ろして顔を隠していた。私は最初、この善良な男は妄想性の病に罹っているのだ、と信じて疑わなかった。

ところが驚いたことに、彼はその後すぐに、完璧に信ずるに足る非常に面白い話相手であることがわかった。彼は流暢な英語で私に、自分のとった奇妙な振る舞いについて説明した。ここでは誰もが彼を知っている、彼は、当地では数少ない、多少とも「純血な」クロアチアの家系の出身であるが、自分ではユーゴスラビアンと感じている、だがそのことは誰にも知られてはならない、それは完全にタブーだから……昨今では、ユーゴスラビア、ましてセルビアといささかでも関わりのある者は、ひどい目に遭うんだ、自分は元来臆病な人間ではない、ただ事態を正確に把握しているだけなのだ、と。ザダールに住んでいるセルビア人、その中には彼の友人もたくさんいるが、彼らは身を隠し、子供をもう学校へやれず、職場を失い、国粹的なクロアチア人から公道で殴られている、こうして多くのセルビア人がもうこの地を去っていった、という。そして、こういう事態を示す例として、家という家の壁に塗料で書かれたスローガン<sup>ひとけ</sup>を車の中から絶えず指し示した。「セルビア人たちに死を」「ツジマン=神」、それらの文字は、いまでも鮮明に私の記憶に残っている。至るところに見られたウスタシャの頭文字「U」—ドイツでの鉤十字とほぼ同じ意味のシンボル—や、ナチスのクロアチア版である「NDH」という落書きも同様にはっきりと覚えている。

彼は私を或る<sup>ひとけ</sup>人気のない駐車場へ誘導した。しかし、彼が帽子をまた普通の位置に戻し、落ち着きを取り戻したのは、ようやく私たちが車から数百メートル離れてからのことだった。旧市街のすてきな路地をぶらついたあとで或るカフェに腰を下ろしたとき、彼は絶えず語り続けたが、同時に、私の問いにも的確に答えた。彼は、ユーゴの現状について非常に暗いイメージを描いたが、それは、スネジャナがこれまで私に伝えてくれたものよりもずっと悪いものだった。彼によれば、戦争は絶対に避けられず、虐殺は測り知れない規模のものになるだろう、というのだった。クロアチアは間違いなく近いうちに独立を宣言する<sup>ひとけ</sup>が、そうなれば、全土がユーゴスラビア〔連邦軍〕の兵隊で溢れることだろう、クロアチアの各地に数百の兵営があるから……もちろんザダールにも……しかしこの軍隊には、セルビア人もクロア

チア人もスロベニア人もムスリムや他の民族もすべてが一緒になって入っているのだ、とのことだった。

ヨシブは私に問題点を説明しようと試みた。「もしクロアチアが独立国家を名乗るようになれば、連邦軍は突然、外国の占領軍ということになる。そのとき、連邦軍のもとにいるクロアチア人はどうなるのか？」と彼は問いかける。多くの者は、もしまだ時間があれば連邦軍から離脱するだろう。すでにそうした者たちもいくらかいる。だが、どの兵営にも備えられている巨大な武器庫はどうなるのか。全土が榴弾でおおわれ、全都市が徹底的に破壊されるのは間違いない。その上、隣人たちは互いに殺し合うようになるだろう、誰もが家に自分の武器を持っているのだから……すべての民族がもつとずっと混ざり合っているボスニアはどうなるのか。民族の混じり合った混血の者たちはどうなるのか。彼らは、クロアチアだけでも数十万人いる。これら、自分がどこに属しているか分からない子供たちは皆どうなるのか。職場は、企業はどうなるのか。旅行者はいつ再びやってくるのか、ダルマチアのほとんど半分の住民が観光によって生計を立てているというのに……

これらすべてのことを彼は、とても小さな声で、ときどき手を口の前にかざしながら、ほとぼしるように早口で話した。それは全く希望のもてない話だったが、残念ながら、かなり説得力があった。にもかかわらず私は彼を安心させようとして、落ちついた微笑を浮かべて言った。そんなことにまではなるはずがない、ヨーロッパはそんなことを許しはせず、どちらの側のナショナリストにもブレーキをかけるだろう、誰も新たな国境なんて望んではおらず、反対に、国境はすべて、一つずつ取り払われていくだろう、と……けれども彼の方が事態をよく知っており、私にもう口を挟ませず、ほとんど攻撃的になって、罵るように言った。まさにその外国、特にドイツこそ、このような展開を全力で支持しているのだ、そのことは誰でも日に何十回となくテレビを見て知っているし、毎日どんな新聞にも出ている、と……

こう言いながら彼は、近くのキオスクへ走っていき、すぐ二つの大判の新聞をもって戻ってきた。そしてその頁を、私の目の前で乱暴にめくり、いくつかの見出しを翻訳した。「憎悪、憎悪、憎悪、どの頁にも、セルビア人に対する、ユーゴスラビア的なものすべてに対する憎しみばかり……それから、ほら、これ」と、彼は、いくつかの写真を指さした。そこには実際、アロイス・モックとヘルムート・コール<sup>④</sup>が写っていた。「彼らがすべてを支えているんだよ。彼らなしでは、ツジマン一派も絶対にこんな振る舞いはできないだろう。誰でもいいからつかまえて尋ねてごらんよ。」彼は、我々の



テーブルのまわりの人たちを指した。“Everybody here knows this.” この言葉はいまも私の耳に焼きついている。そして私は、その後の数日、数週、否、数ヵ月間、多くの人にこのことを尋ねてみた。誰の答えも、ヨシプが正しかったことを証明していた。ドイツ抜きには、クロアチアでは何も動かないだろう、と。

あのとき私がヨシプから初めて聞いたことは、他にももっとたくさんあったが、それらのことを私は、ようやくその後の数ヵ月あるいは数年のあいだにゆっくりと理解していったのだった。たとえば、誰もが知っているのにチトーの統治下でも口にすることが許されなかった、第二次大戦中のウスタシャの残虐行為について、また同様に、クロアチアに住むセルビア人を不当に差別する改革後のクロアチア憲法について、また、どんな小さな場所でも見られるようになったカトリック教会の強力な進出について、またウスタシャの時代から継承された赤白の格子模様をついた新しいクロアチア国旗—誰の目にもウスタシャ精神が甦ったことの見逃すことのできない合図だと映った—をめぐるお芝居<sup>(26)</sup>、少し前に起こった、いわゆる「ダルマチアの水晶の夜」<sup>(27)</sup>—この言葉をヨシプはドイツ語で言った—や、その他のたくさんしたことについて……それに続く数年のあいだ、種々のことが展開していく中で、私はいつも繰り返し思った。そのことは、当時すでにヨシプが私に予言してくれていたのだ、と。

私たちの会話は、ある奇妙な出来事によって突然打ち切られた。私たちはずっとザダールの旧市街の中央にある小さな路地、カラ・ラルガに向かう角にある小さな広場に面したカフェに座っていた。私たちの周りでは、忙しく慌ただしい動きが飛び交っていた。そのとき突然、奇妙な物音が耳に飛び込んできた。ヨシプは沈黙し、路上の人々は立ち止まり、張りつめた表情でじっとその場に立ったままだった。突然、カフェ内のほかのテーブルの客たちも立ち上がった。ただ私たちだけが座り続けていた。私は依然として、何が起こったのか分からないままだった。そのときヨシプが私を軽く突き、カラ・ラルガ通りの方を指し示した。そこには丁度、本格的なカトリックの聖体行列の先頭が姿を現わしたところだった。金色の飾りで被われた司祭、旗、聖体顕示台、香炉、侍者たち、それらは、私たちのところでの聖体の祝日と全く同じものである。そしてその後<sup>うしろ</sup>に、びっしりと押し合いながら<sup>ひしめ</sup>いる信者の群れ、彼等は、誰にともなくつぶやくように、一種のロザリオの祈りと思えるようなものを唱えていた。「奴らは神に、自由なクロアチアを、つまり戦争を乞い願っているんだよ」と、ヨシプは私に囁いた。

それは無気味な光景だった。私たち二人はそこに座り、そこから五メートルも離れていないところに、果てしなく続くかのような聖体行列、そして信者たちのくぐもった祈りの声がしている。私たちの周りを、私たちに秘かに悪意のこもった視線を投げる人々が立って取り囲んでいた。そしてヨシブはますます神経質になっていった。「ぼくは立たなければならない、立たなければならないんだ」と、彼は私に何度も囁いた。けれども彼は勇敢にも座り続けていた。私も抗議の意志をこめて座席を動かずにいた。が、突然—私はそのことにすぐには気づかなかった—彼がいなくなっていたのだ。彼は消えたまま戻ってはこず、たっぷり二時間ものあいだ、私はどうしたらいいかわからなかった。なぜなら私は、自分がどこにいるのか、私の車がどこにあるのか、私はどこへ行ったらいいいのか、まるで見当がつかず、スネジャナの電話番号さえそのとき手元にもっていなかったからである。

そのあとまた突然、私は彼を見つけた。約30メートル離れたところから、彼は私にこっそり合図を送っていた。私は、安心すると同時に非難がましい気持で、彼の方へ急いで行った。ところが、彼はまるで人が変わったようにすっかり度を失って、ほとんど一言も口をきかなかった。私たちは、来たときよりももっと早く車を飛ばして帰り、彼は私をスネジャナのもとに送り届けてくれた。そのとき以来、私はヨシブに会っていない。

スネジャナは、ダルマチア人特有の熱情的な気性のほかに、何か不思議な、人を宥めるような面も持っていた。ヨシブの振る舞いや彼が私に語ったことについての私の頑固でしつこい質問に対して、彼女は全く取り合わなかった。彼女はただ、私がそれらすべてのことをあまり真剣にとってはいけないと言うだけであった。だってヨシブはただの愚かな若者じゃないの、それにそもそも、もう何度となく言ったように、この人たちはみんな、いまは少し頭がおかしくなっているのよ、と。(何年も後になって私は、ヨシブがあのとまもなく外国へと去っていったこと、あのとき、噂をしていた彼の伯父が行列に入って行進しており、喫茶店の前に来たとき、伯父の目と彼の目が合ってしまったことを知った。) スネジャナにとっては、そういうことはもう終わったことだったのだ。

もう半年も前から彼女は私に、ザダールの或る有名な魚料理店に私を案内できる日のことをどんなに楽しみにしているかを、夢中になって話して聞かせていた。彼女は、それをいま、台無しにしたくはなかったのだ。それで私たちは、高級なヨットクラブの中のレストランでおいしいスズキのグリルを、すばらしいワインと共に味わい、世の中のことは忘れた。そこには、私たち

以外の客はいなかった。

\* ツーペ — あるいは、ダルマチアの水晶の夜

私はその夜、とても近代的な住宅街の中にある、きれいな大きなワンルーム・マンションに一人で泊った。翌朝七時頃、スネジャナが私の前に現れた—心配そうな顔をして。「車が！」と、彼女は言った。「どうしてあんな軽率なことをしてしまったのかしら、車を家のすぐ前に停めるなんて！」私たちの借りたレンタカーは、実際、ひどい外見になっていた。フロントガラスは割られ、二個のドアはへこまされ、ナンバープレートは剥ぎ取られていた。こんなふうはその日は、さんざんな始まりだった。やれやれ、それでも車はまだ何とか走ることはできた。その車は、どっちみちその日に返さなければならぬことになっていた。それならどうしようもない、とにかくここから出なければ！

私たちがAVISのオフィスに着くと、また新たな驚異に出くわした。そのオフィスは、街の最も賑やかな場所にあった。そこは、半島の方へ通じる歩行者用の橋がかかっているところで、私がのちに何度となく通ることになった場所である。そこにそのオフィスはあった、否、あるはずだった。私たちがそこに見たもの、それは、完全に破壊された建物だった。窓とドアは、煤けて黒くなったただの穴になり、内部にあるすべての物が黒焦げの炭と化し、ただ壁だけがまだ立っていた。街のど真ん中に出現した何というおぞましい光景……どうしたらいいのか。私たちは電話番号をいくつか持ってきており、最終的に地元のAVISの店長と連絡がついた。彼は私たちに、彼の自宅へ来てくれるようにと頼んだ。そこで私たちは彼のところへ行った。彼の家は町外れにあった。

スネジャナが彼に私たちの状況をセルボ・クロアチア語で説明したあと、彼は私に、ちゃんとしたドイツ語で挨拶した。「私はセルビア人で、そのことに誇りをもっています。私たちは、もしかしたら全員死ぬことになるのかもしれませんが、私たちは戦います」と……やれやれ、それなら、当時すでにそれについてたくさん読み聞かされていた、あの類のセルビア人の一人がおそらく今ついに現実に現れたというわけか、つまり、激情に溢れ、戦闘的、誇大妄想的、受難的、宿命的で被害妄想に取り憑かれている、というような……私は彼と共に半日を過ごした。それは、ときどきするような時間だった。

ツーペ —それが彼の名前だった— は、いかにも頑強なタイプだったが、

決して好感のもてない男ではなかった。私の恐れに反して、彼は、壊れた車に何の関心も示さなかった。私は、保険のための何らかの署名をしなければならなかったという記憶さえない。その男には、それ以上に大きな心配事があったのだ。けれども彼には時間もあった。その上、彼はとても話し好きだったが、それが私には大変好都合だった。というのは、質問したいことが次々に私の頭に浮かんできたからである。すっかり焼失してしまった彼の事務所について彼が語ったことは、怖いおとぎ話を聞くようだった。およそ一カ月前の五月初めのこと、ヨシブも言及していた、あの「ダルマチアの水晶の夜」がザダールで起こった、というのである。

>>以下、「ダルマチアの水晶の夜」については、次号に続く<<

#### 〔訳注〕

- 1) Gabriel Kolko: "Century of War: Politics, Conflicts, and Society since 1914" 1995. G.コルコはアメリカの歴史・政治学者。最近、この姉妹書ともいふべき"Another Century of War?" (2002) を著している。邦訳書には次のものがある。『ベトナム戦争全史・歴史的戦争の解剖』（陸井三郎監訳、2001、社会思想社）。
- 2) 1900年義和団事件で、外国人排斥を掲げて北京の列国公使館区域を包囲した義和団から居留民を守るという名目で、日、英、米、露、仏、独、伊、オーストリア8国が連合軍を組織して中国へ出兵。1901年の北京議定書により、首謀者の処罰、列国の華北駐兵権、賠償金の支払いが決められた。
- 3) ユーゴスラビア連邦コソボ自治州で独立を求めるコソボ解放軍と連邦軍の武力衝突が激化する中、NATOは、同州におけるアルバニア系住民の人権抑圧を理由に、1999年3月24日から6月10日までの68日間、国連の決議を経ないままユーゴスラビア連邦に対して空爆を行ない、多数の死者を出した。
- 4) ヨシブ・ブローズ・チトー。第二次大戦中パルチザンを指揮してナチス・ドイツの侵略に抵抗し、1945年ユーゴスラビア連邦人民共和国（のちにユーゴスラビア社会主義連邦共和国と改称）の初代首相、のち大統領となる。1948年コミンフォルムから追放され、非同盟、自主管理社会主義を柱とする独自の路線を貫いた。
- 5) ダルマチアは、クロアチアのアドリア海沿岸地方。ザダール、スプリツ

ト、ドゥブロブニクなどの街があるが、いずれも 1990 年代のユーゴ内戦で甚大な被害を蒙った。

- 6) その背景に、1989年11月のベルリンの壁開放以降の東欧各国における社会主義政権の消滅、91年のソビエト連邦の崩壊に至る過程がある。
- 7) 「冷戦」時代、東西いずれの陣営にも属さないアジア・アフリカ諸国を中心にした国々が、「非同盟」という緩やかな連合をめざして連携。コンフォームから追放されて独自の非同盟外交を追求していたユーゴスラビアもこれに加わって、これらの国々との関係を強め、そのリーダー的存在となっていく。1961年の非同盟諸国首脳会議および（チトーの死後でユーゴ内戦直前の）1989年にも同会議が（130カ国が参加して）ベオグラードで開かれている。
- 8) 第二次大戦後に成立したユーゴスラビア連邦は、1992年のスロベニアおよびクロアチアの独立によって解体する前まで、「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」という言葉に象徴されるような多民族複合国家であった。
- 9) 第二次大戦に従軍した経験をもつ、1924年生まれ of 著述家。主著は1970年以降取り組んで現在も継続刊行中の“Kriminalgeschichte des Christentums”（『キリスト教の犯罪史』）。なお本書の巻末の文献目録に挙げられているのは、“Mit Gott und dem Führer”（『神および総統と共に』）1988。
- 10) 1932年にクロアチア民族主義者、アンテ・パヴェリッチによって結成された集団。第二次大戦中、ドイツ占領下で、ナチスの傀儡国家「クロアチア独立国」を樹立し、ナチスと同様、ユダヤ人、ロマと共に数十万人のセルビア人を強制収容所に送り、虐殺した。
- 11) 第二次大戦中に結成されたセルビア民族主義者の集団。当初、枢軸軍に対して「ユーゴ王国」を守ることを目的としていたが、大セルビア主義的立場により、クロアチア人やムスリムに対する攻撃を繰り返し、併せて数十万人殺害し、民族平等を掲げて枢軸軍と闘うパルチザンと対立。パルチザンの勝利と共に後退した。
- 12) ユーゴスラビアのイスラム教徒またはイスラムの文化を継承する人々の総称で、同地における主要三民族の一つ。1971年以降、セルビア人、クロアチア人などと同様の民族名として公認された。歴史的には、オスマントルコの支配下にイスラム教を受け入れた人々の流れを汲み、ボスニアやセルビア南部のサンジャク地方等に多い。
- 13) ナチス（またはその流れを汲む組織）の親衛隊。

- 14) サラエボの中心にある、同形の2つの建物から成る双子の塔。UNISは、ボスニアの企業名。
- 15) 1989年11月9日のベルリンの壁の開放、90年10月3日の東西ドイツの統一により、ベルリンは、統一ドイツの首都として甦った。
- 16) 背景に、1989年、スロベニア、クロアチア、セルビアで複数政党制が導入されて共産主義者同盟が解体し、90年の自由選挙により、セルビアを除く各共和国に民族主義政権が誕生して、連邦からの離脱の動きを強めていった状況がある。
- 17) キリスト教・正教のクリスマスはユリウス暦により1月7日である。
- 18) セルビアのナショナリストで、かつての王党派やチェトニクと思想的に近い「セルビア新生党」の結成者。90年代、ミロシェビッチに対する反対運動の先頭に立っていたが、その後、彼と組み、NATOによる空爆時のセルビア共和国首相代理を務めた。
- 19) 1987年セルビア共和国幹部会議長、90年セルビア共和国大統領、97年ユーゴ連邦大統領に就任。ユーゴ内戦期間を通じてユーゴ元首の位置にあり、国連の「旧ユーゴ国際刑事法廷」（通称「旧ユーゴ国際戦犯法廷」）より「人道に対する罪」で起訴され、現在も審理中。2000年の大統領選挙で野党連合のボイスラフ・コシュトニツァに敗れ、同時に起こった民衆蜂起の結果、失脚。
- 20) クロアチア西部のセルビア人多数地域。同地域のセルビア人たちは、クロアチア共和国のツジマン政権の発足と共にクロアチアのユーゴからの分離独立の動きが強まったのに伴い、1990年「クライナ・セルビア人自治区」を創設、91年、クロアチア東部の「スラボニア・セルビア人自治区」と合併して「クライナ・セルビア人共和国」を結成したが、95年8月のクロアチア共和国軍の電撃侵攻作戦によって制圧され、当地に住むセルビア人は難民となって脱出した。本書の後掲章「クライナ地方を通過して」（78～80頁）参照。
- 21) このときユーゴを代表していた「レッドスター・ベオグラード」は、ベオグラードを本拠とするセルビアの名門チーム。この決勝戦から1ヵ月も経たない91年6月25日、スロベニアとクロアチアの両共和国がユーゴ連邦からの独立を宣言した。
- 22) 注(20)参照。ここに記されている時期、この地方はセルビア側の管轄下におかれていた。
- 23) 注(21)参照。独立宣言後、両共和国で各共和国軍とユーゴ連邦軍とのあ

いだで戦闘が起こり、ユーゴ全土の内戦へと拡大していくきっかけとなった。

- 24) 注(5)参照。クロアチアのアドリア海沿岸の諸都市は、「アドリア海の宝石」と呼ばれたドブロブニクをはじめとして、かつて海洋貿易の要衝として栄えた面影を残す古い町並みと美しい風景によって中欧屈指の観光地であった。
- 25) 当時のオーストリア外相とドイツ首相。76～77頁参照。
- 26) クロアチア共和国の旗は、ユーゴ時代は、赤・白・青の汎スラブ色の横三色の中央に、金色の縁どりのある赤い星を置いたものであったが、独立直前に中央の図柄を変更し、1868年以降のクロアチア王国の紋章でウスタシャ時代にシンボルとして使われた赤白の格子模様を採り入れたものにした。ただし、国内外からの批判を浴びた結果、新しい国旗は赤と白の配列を変え、古い国旗では格子模様の左上が白から始まるのに対して、赤から始まるようにした。
- 27) 「水晶の夜」は、ナチスがユダヤ人の商店、住宅、教会等を破壊し、大虐殺を行った1938年11月9日の夜。